

「新しき村」運動の一波紋

——「新しき村」福岡支部と新資料 倉田百三・武者小路実篤書簡——

岩 崎 文 人

武者小路実篤の『新しき村』創刊は大正七年七月、実篤が同志とともに日向に向かい、宮崎県児湯郡木城村字高城の地に「新しき村」開村を決したのは、大正七年一月一日のことである。

「新しき村」は、よく知られているように、実篤を中心とする入村会員と、事業に賛同する村外会員とで構成され、村外会員は、それぞれ各地に支部を作った。

埼玉県入間郡の「新しき村」（昭和一四年九月開村）を含め、「新しき村」の実質と入村会員については、今日、かなりの研究調査がなされており、「新しき村」の現代的意義も次第に明らかになりつつある。¹⁾

言うまでもなく、「新しき村」は、武者小路実篤を初めとして、入村会員はもとより、村外会員及び支部活動等をトータルな形で把握することによって、その全貌に近づき得るわけであるが、支部についての研究調査は、今なお十分と言える状況にはない。

ここに報告するのは、「新しき村」福岡支部の創設とその活動のささやかな一斑である。

広島で骨盤カリエス等の治療を受けていた倉田百三は、肋骨カリエスを併発し、大正七年七月、九州大学附属病院で手術を受けるために福岡に向かう。がしかし、百三には、手術を受けるだけの体力がなく、そのまま福岡に滞在することになる。

「新しき村」福岡支部創設への最初の階梯は、実は、百三の福岡滞在に始まる。

実篤の思想に共鳴していた百三の村外会員への入会は、「新しき村」開村間もなくの大正七年二月初め前後であり、福岡支部の所在地が「福岡市西町今川橋金龍寺内、倉田百三方」として、『新しき村』に最初に載るのは、その第二年四月号（大8・4・1）である。ちなみに、そこに記載されている支部は、福岡支部の他、東京、大阪、京都、神戸、信州、浜松、函館、青森、横浜、盛岡の一〇支

部である。百三が病氣療養のために明石市に転居するのは大正八年一月であるので、結局、百三が福岡支部の代表であったのは、半年余というごくわずかの期間にすぎない。が、支部創設と活動基盤の確立といった点で百三の果たした役割は決して小さくない。

福岡支部が記録に残る実際の活動を展開するのは、百三の後、福岡支部を継承した真砂嘉十郎の時代である。

嘉十郎は、福岡県筑紫郡安德村に、明治二七年五月二二日に生まれ、郷里で小学校の教師をしていたが、百三が福岡に滞在していたときには、福岡市大名町に居住し、のち、太陽生命保険株式会社九州支社、博多無尽（現在の西日本銀行）に勤務し、昭和三八年一月八日に他界している。

百三が創設した福岡支部を嘉十郎が引き継ぐに至る経緯は、『福岡雑信』（『新しき村』第三年一月号 大9・1・1）に詳しい。

西町金龍寺の益軒堂に病を養つてきた倉田兄を神戸へおくるのは随分淋しく思ふ。

気候の変化の多いこの地が病の人によくないのはよく承知してゐるので、医者言葉はあり、ことにだじの兄の身のことを思へばお引きとめすることも出来ない。それでも、これまでもながいあいだみんなが兄をかこんで親しみなづいてゐた美しい友情を思ふとたとひ行けば逢へるにせよ、かうして別れるのがたまらない気をさせる。

兄は愈々この十五日の黎明に神戸の黄楡園に向つてたたれる。あちらに落ちつけば創作にとりかかれる筈だし、京都で『出家とその弟子』の上演もあるし、それをばせめてものなぐさめとして深くおくりたい。

兄の身に一日も早く快癒の日をめぐらしよ。そして兄の芸術の上によく光あらしめよ。

真砂嘉十郎は、相当の文学青年であつたらしく、白雨という号を持ち、大正五年五月に創刊された地元雑誌『郷土芸術』（発行所・福岡市博多吉塚／郷土芸術社／発行人・福岡県筑紫郡粕堅町六八九番地／山田篤）の編集発行にも深く関わっている。その第四号（大6・6・1）には、嘉十郎は、短編小説「泥」、短歌一七首（海辺秘事）を発表しており、編集上の都合と推測されるコラム評論「『流れゆく生』を讀みて」と『編集後記』の一部（いずれも署名は「嘉」も担当している。また、ほぼ同時期と見られる同人雑誌『人』第二号（B5版。表紙ガリ刷り。本文は活字印刷。奥付なし）には、短編小説「冷熱」、白雨名で短歌十首（「涙しる秋」）を発表している。さらには、嘉十郎は、演劇運動にも身を投じ、支部主催の演劇では二階堂哲哉名で演出、監督を手がけてもいる。

嘉十郎が福岡支部の責任者であつたのは、大正一一年六月、神田晴子が支部を受け継ぐまでのあしかけ四年間であつたが、その間、嘉十郎は、精力的に「新しき村」福岡支部の活動を行っている。

「福岡雑信」と嘉十郎の残した写真他の資料から、その一部を列記すれば、次のようになる。

第一回泰西名曲レコード音楽会 大正八年一月八日

(於福岡市記念館)

第二回泰西名曲レコード音楽会 大正九年九月一日

ロダン彫刻展覧会 大正十年九月四日(於福岡県第一公会堂)

異象舞台劇研究会第一回試演 大正十一年二月二五、六日

(於福岡市記念館)

異象舞台劇研究会第一回朗読会 大正十一年五月七日

(於福岡市記念館)

異象舞台劇協会第二回試演会 大正十一年二月八日

(於福岡市記念館)

第一回泰西名曲レコード音楽会については前出「福岡雑信」の百三三に関する記述に続いて詳しく、第二回のそれは、「新しき村」第三巻第一号(大9・11・1)の「福岡雑信」に詳細に報告されているのでここでは触れない。ただ、この催しが「得た金を村に送り、幾らでも、村の経済を助けたい」というところから出発したものであることは付け加えておきたい。事実、のちに紹介する武者小路実篤書簡の中に、送られた寄付に対する礼状⑩が含まれている。ロダン彫刻展覧会に関しては、のちに新劇俳優として名をなす薄田研二(明31・9・14〜昭47・5・26 福岡市西新町生まれ。)を真ん中

に支部会員ら一二人が写った記念写真一葉が残されているが、それ以上のことははっきりしない。他にも、嘉十郎は、泰西美術展覧会も催していたらしく、大正十一年九月九、一〇日に、第一公会堂で開催された記念写真一葉を残している。異象舞台劇研究会の第一回試演は、のちに上げる百三書簡⑦にも触れられているが、残されているパンフレットによれば、主催者側のメッセージは、次のようである。

劇があらゆる芸術の総合であり、かつ人人の魂の上に最も重要な深い交渉をもつものであることは申すまでもありません。私共は、在来の邦劇に対しあまりに淋しさを感じる。もつともつと早く、もつと高いところまで、ひきあげられてゐてもよかつたとおもふ。私共はその不満から立ちあがりました。私共の舞台はよし未熟でも、ほんたうに真剣に、真心を生かききつて、舞台を築いてゆく以上、そこになにか、深い、善きものを齎さずにはやまぬとおもひます。

私共は舞台のみを以て演劇の全面とする在来の演出者の気持に不満をもつ。場内の雰囲気と観客の気持とがびつたりして、そして澄みきつて、舞台に抱かれるまでにゆかねばうそだとおもひます。

二回三回と試演を重ねてゆくうちに、すべてをよりよく生かしてゆきたくおもひます。

こんどの試演について特に後援してくださいました九州日报社と、それからいろいろ好意をつくっていただいた多くの人人に謹んで感謝いたします。

二階堂哲哉

異象舞台劇研究会

事務所 福岡市大名町二丁目二ノ二

「新しき村」福岡支部内

二階堂哲哉は、先に記した真砂嘉十郎である。演じられたのは、順に、倉田百三の「出家とその弟子序曲死ぬるもの」一幕、武者小路実篤作「二十八才の耶穌」一幕、百三の「俊寛第三幕」一幕であった。第二回の試演会パンフレットは残存しないが、残された写真によれば、演じられたのは、「出家とその弟子」、武者小路実篤作「ある日の一休」である。

「第一朗読会」のパンフレットも残されている。そこには次のように言う。

およそ戯曲として実演を意図して書かれたものであればこれを舞台にのぼせてはじめてほんたうのものが味へるものであることはまうしあげるまでもありません。

しかしまた一方作者が実演を意図しないで、舞台面を自由にころろゆくままに取扱つた所謂レーゼドラマがあります。

私共はこれらの芸術を朗読によつて活かしたいとおもひます。そして、それによつて、作者の意図した戯曲的幻影の現像を期し、そこにひとつの台詞劇としての独特の味ひを出せるものであることを信じます。

さういふ見地からこれからも出来るだけ屢々この種の朗読会を催してゆくつもりです。

しかし私共は朗読のみを以て甘んじはしない。勿論事情のゆるす限り出来るだけ度々実演をやることにつとめます。

ただに私共は芸術に殉じてひたすらなる道を辿ります。

(二階堂)

事務所 大名町二丁目真砂嘉十郎方

「新しき村」福岡支部内

実際に朗読されたのは、順に、「出家とその弟子第五幕」、チェホフ作小山内薫訳「犬」、百三作「布施太子の入山第三幕」である。

異象舞台劇研究会と異象舞台協会との関係は、単なる名称変更にすぎないのか、あるいは、特別の事情があつたのかどうかつまびらかでないが、第二回試演会の記念写真に付された同人名は、二階堂哲哉（嘉十郎）、幸田浩、園池一麿、芥屋潤作、渥美承助、京極徹、三好善郎、宮島利彦、霜山むら、日高圭介、ゴトウヂベエの一名である。

音楽会、試演会、朗読会のその後は、嘉十郎の残したアルバムからはうかがい知ることが出来ない。あるいは、芸術に若い日の情熱を傾けた一青年の支部責任者交代とともに終わつたのかもしれない。嘉十郎の年賀状には、晩年まで、毎年自己の心中を淡々と詠み込んだ俳句あるいは短歌数首(句)が添えられている。

真砂嘉十郎を中心とする「新しき村」福岡支部草創期の活動の主なものは、おおよそ右の通りである。

以下に紹介するのは、福岡時代および支部を離れてなお支部の動静に心を砕く百三の嘉十郎宛書簡(一)―一通(うち一通は支部宛)と同じく嘉十郎宛の武者小路実篤の書簡(二)―一通、「新しき村東京支部」出しの葉書二通である。これらの書簡を通して、「新しき村」福岡支部の動向がいつそう鮮やかになることと思う。

一 真砂嘉十郎宛倉田百三書簡

①大正八年(推定) ②以前カ(封書・筆書き) / 〈裏〉欠

御手紙拝受致しました、武者小路さんが上京の途中を立ち寄る由宿は私方のお寺の座敷がありますから心配ありません、私も此の頃は元気ですから。皆集りませう。随分嬉しくおもひます。草雜といふ人も立ち寄る由、外に適當の宿が無かつたら私方でもよろしう御座ります。三重県の黎明の丘の宇都宮といふのは、よく知りませんが、若しか新しき村のやうなものをこしらへやうとしたのなら、随分ひ

どい気がします。警察は分らぬ人が多い。何か租税か何かの問題なのですか。お目にかゝつてお話しを聴きたく思ひます。先日古い郷土芸術であなたの歌を偶然発見して嬉しく読みました。つゞけておつくりになつてはいかゞですか。

百三

②大正八年九月(推定) (葉書・ペン書き) / 〈表〉西町金龍寺方 倉田百三

十月の集りは第三日曜日にしましょふ 此度は少しおもしろくやつてみませふ 私の家で集ることにしましょふ 午后にしましょふ雑誌は郵送しなくても集りの時でよからうと思ひます 神戸から房子さんが 村之写真を送ってきて下さつてゐます それにはイワン君もおります。

集りの時のまんぢゅうを是非恵良君の内ではしてもらひたいものです 村へも送るやうに。おついでの時御話しておいて下さい 風が寒むいので家の中に□□(二字不明) 込んでばかりあります

③大正九年一月一日(消印9・1・20) (封書・ペン書き 本文・原稿用紙(20×10) / 〈裏〉一月十九日 明石市戎町五軒屋敷 倉田百三)

此の四五日はひどい嵐で、海が荒れて物凄しい程でしたが、今日は風もおさまつて、晴れた海に白帆が浮ぶやうになり、私の心も落付

き、今朝「父親の心配」といふ戯曲の初を少し書きました。先日「新しき村」の正月号で、君の福岡雑信を読んで懐しく思ひました。これからはなるべく毎月通信を出したらどうかと思ひます。あれを讀んで急に福岡が懐しくなりました。君は毎日会社に通つてゐられることゝ思ひます。福岡へは本当に、も一度早くゆきたい気が致します。私が健康な身体だったらと、残念に思ひます。神戸の方へでも行かれるときには何卒寄つて下さい。私は毎日仕事と読書と祈禱と音楽とで暮らしてゐます。風邪を恐れるので外出することは殆んどありません。海を眺めたり、地三と遊んだり、するくらひなものです。それではなんとなくに單調な暮らし方をしてゐます。たった一度正月の二日に、あまり天気がよかつたので車で散歩に出ました。明石中の町や川や森や寺や城や公園や見て回りました。私にはすべてものが物珍らしく生々と印象しました。私のやうに閉ぢ籠つてばかりゐては、生活経験が乏しくて仕事の材料がなくなりはいまいかと、不安な氣もしますが、然し、心を貧しくして、深く物を考へ、よく人生を見れば私の周囲にも無限の材料があるやうな氣もします。私は今は楽しみは、仕事の外にはなくなりました。神戸までゆけば色々の催事もあるけれども、風邪をひくことを恐れるのでまだ一度もゆきません。晴れた日には港に集る船を數へ、窓の外少しばかりの草木や、それに來て鳴く小鳥や、また鉢植のスマシレや福寿草やを愛して、慎ましい養生の日を送つてゐます。君に貰つた花瓶には

梅と猫柳が挿して、位牌のそば、一枚起請文のそばに置いてあります。君に書を書いて送る約束になつてゐますが、何しろ字が劣いで不安を感じますが、思ひ切つて書いて送りませう。待つてゐて下さい。伊藤君や、高山、高倉、武内君や、福岡で親しんだ人々のことがいつも思ひだされます。明石の土地に親しみが出来ないの、何んだか福岡が故郷で、明石に仮住居してゐるやうな氣が未だになくなりません。あの善良な恵良君はどうされたやら、近いうち手紙を出したいと思つてゐます。先日伊藤燦子さんと、北尾さんとが來て下さつて、福岡の話を書いて懐しく思ひました。家内が昨夜君の夢を見たそうです。よろしくいつてくれとのこと。私の「俊寛」は新小説の二月号に出ますから見て下さい。何しろ、二年前の着想なので、今の私にはピッタリしないところもあり、少し自信がありませんが、人のと較べれば恥しいとは思ひません。兒島君は女の子が生れました。熱が十一月からつゞいてゐるそうです。伊藤君のことが案じられます。あの誠実な、心の貧しい、画家の上に祝福のあるやうに祈らずにゐられません。貴方は暇のときに歌をつづけてつくられては如何ですか。何か芸術の営みを続けてゐることは、大変心の糧になると思ひます。私は歌には大変興味を持ってゐます。形が短いからといって、少しも低いものとは思ひません。中村憲吉氏の林泉集など感心しました。木下氏のもいゝと思ひます。中村氏などは一方に他の仕事を持つてゐるのです。君も身を入れて歌を続け

てゆかれたら如何ですか。お勧めします。貴方と貴方の母上に祝福を祈ります。ではいづれました。

一月十八日夜

真砂嘉十郎様

倉田百三

④大正九年十月八日（消印9・10）（封書書留・ペン書き／
〈裏〉八日 明石市無量光寺内 倉田百三）

その後、御無沙汰してしまいました。先日は花立てを送って下さって、嬉しく頂戴致しました。何時も、便りをしたいと、思ひながら、エネルギーがすくないので、沢山手紙を書かね（は欠カ）ならないところがあるので、遂重隆君や、お晴さんに、書いて貰ふ事になって了ふので、すまなく思っています。実は、今日も、御願ひがあつて、この手紙を書いてあるので心苦しいのですが此頃、お晴さんが病気で寝てゐるので、炊事をして呉れるものがあないので、やむを得ず、重隆君にやうて貰つてゐるのですがお晴さんの病気が長びきさうなのに、重隆君も、風を引いてゐますし、何時までも、炊事をさせるのが、気の毒なので今ゐる子守の姉の松永はつ、と云ふ娘に来て貰ひたいのですが、本人も、かねて来たがってゐるのですが、一人で明石まで来る事を、得しないので、此方から、迎ひにやると云つても、重隆君は、一日も離せないで、まことに、申しかねますが、支部の方で、だれか僕の宅まで、つれて来てやうて、貰ふ事は出来

ますまいか。僕の処へ、遊びに来るつもりで、だれか来て下されば、大変助かるのですが、もし、支部のだれも、手が引けなかつたら、だれでも、遊んでる人で、明石へ遊びに来るつもりで、つれて来て呉れる人はないでせうか。一つ申しかねますが心配して見て戴けませんか。とにかく旅費を、送っておきますから、何分御願ひ致します。一日も早く、来てほしいので、今日も、困つてゐる様な訳なのです。僕も、腸をそこねて、流動食ばかりで弱つてゐます。私達は、近い中に、東京の方へ、引き越すつもりです。それから、レコードを五枚庄原へとよいたと云つて来ましたが、後の五枚が福岡に残つてゐさへすれば良いのですが、もし村へまぎれて、行つてゐるのだったら、一寸知らべて、下さいませんか。福岡の事はいつも、思ひ出して、なつかしくなります。支部も新しい人も入り、今度、武者小路さんが帰る時には、演説会があるそうで、君や高山君なども、やられる事だらうと思つて、行つて見たくなります。僕は、四五日前まで、仕事をつゞけてゐましたが、腸をそこねてやすんでゐます。皆病人になつて閉口です。しかし、皆大した事はありませんから、安心して下さい。今晚は元気がないので、これでよします。女中の事、を何分よろしく御願ひします。女中の家は

北港町九百九十一番 松永萬吉方です。

伊藤成一君がその家をよく知つてゐますから、伊藤君とも相談して下さい。支部の諸君に、よろしく伝えて下さい。では御無理な御願

ひまで。御大切に、いづれまた。

八日夜。

倉田百三

真砂嘉十郎様。

⑥大正九年十月二十日（消印9・10・21）（葉書／ペン書きへ表）

十月廿日 明石市無量光寺 倉田百三

先日は女中のことを御願ひして色々御世話になりました。お陰で大変助りました。君が来て下さることが出来なくて御目にかゝれなかったのは残念でした。私は二十八九日には東京の方に引き越すつもりです。重隆さんは全快しました。僕の腸も大分よくなりました。お春さんはまだブラ／＼して居ます。が大したことはありません。私は仕事が出来なくて閉口して居ます。正月には論文集を出します。待つて居て下さい。武者小路さんも二十四日に私方に來ます。福岡の演説会に行つて君のを聞きたいものです。

⑦大正十年十月四日（消印10・10・5）（封書／ペン書きへ裏）十月四日 大森入新井村新井宿子母沢一〇三八 倉田百三

真砂嘉十郎様

お手紙嬉しく拝見しました、何時も手紙を書こうと思ひながら忙しいので、そのままになってしまつてすみませんでした、福岡のことはいつも／＼思ひ出して懐かしく思つてゐます、体さへよかつたら

一年に一度位は是非あつてみたいだけの執着を持つてゐます、写真を見て随分嬉しくおもひました、君、高山君、河村君、等本當になつて思ひました、君の潔癖のことなど思ひ出して、ほゝゝゝみました、君が指尖でムギワラ帽子をはじきながら息をふいてはこりを払つてゐた様子など目にみえるやうな気がしました、河村君は又大変おとなしくなりましたね、大須賀君が丈夫になられたのは随分喜びです、私のも希望があるやうな気がして、心強くなりました。高山君が上京するそうで、逢えるのを楽しみにしてゐます、あの善良な恵良君によろしく伝へて下さい、酒井君の、絵会、うまくゆくことを祈ります、

金龍寺の、あの家にも一度ゆくことがあるでせうか 人生の悠久を感じます、僕はわりあい元氣にくらしてゐますから、喜んで下さい 二三日の内に岩波から出る思想といふ雑誌の創刊号に僕の新作戯曲「父の心配」と云ふ現代四幕物が載ります、又、単行本には水辺といふ一幕物が出ますから、祝して下さい 君は歌をどうしましたか 僕もその内写真を支部宛に送ります 諸君にどうぞ宜敷御伝へ下さい 明日武者小路兄が僕の宅に來てくれることになつてゐます、時候が悪るいから、大切にして下さい ではいづれまた

十月四日

倉田百三

⑧大正十一年二月二十五日（消印11・2・26）（封書／ペン書き

〈裏〉二月廿五日 相州鎌倉額田病院内 倉田百三

明日は愈々芝居の試演のある日ですね。親しみ深い福岡支部の人達によって俊寛の三幕が上演される事をうれしく思ひます。うまく行けばいゝがと蔭乍ら祈つてゐます。高山君の俊寛はこちらでやった時の成績では左団次よりもいゝ位の出来で力の籠つた内面的の演出でしたから、御地でも屹度いゝだらうと想像してゐます。其の他の諸君のも福岡にあれば見られてどんなに楽しみだらうと残念に思ひます。新聞へ出す文章は非常に忙がしいのと、書く事がないのでついに得書きませんでした。実は今非常に忙がしくて書き物がつかへてゐて、休みなく書いても曠野社の方へ不義理をせねばすまないやうな次第なので遂に間に合はなくなりました。許して下さい。「出家と其の弟子」が広島迄行きますが序に福岡でもやるといゝと思ひます。他の大都会では殆んど全部やる事になりました。支部の諸君によろしく伝へて下さい。二月廿五日 倉田百三 真砂嘉十郎様

⑧大正一二年九月廿九日(消印12・10・1) (葉書/へ表) 大森 倉田百三

御心に御かけ下され ありがたく存じます 御かげさまにて皆々無事でございましたから御放念下さいませ 先づはとりあへず御礼まで

九月廿九日

⑨昭和四年一月一日(消印4・1・3) (葉書/印刷)

恭賀新年 昭和四年一月元旦 神奈川県藤沢町元町五五六 倉田百三

⑩昭和五年から昭和七年の間(推定) (葉書/印刷) *印筆書き

へ表 生田区柳町二二 倉田百三 宛名書きは別人の手によるカ) 謹賀新年 一月元旦 *いつも御幸福を祈つて居ます

⑪昭和八年一月一日(消印8・1・1) (葉書/印刷) *印筆書き)

恭賀新年 昭和八年元旦 東京市大森区新井宿四丁目一〇九 * 倉田百三

⑫昭和九年一月一日(消印8・12・31) (葉書/印刷)

恭賀新年 昭和九年元旦 東京市大森区新井宿四丁目一、一〇九番 地 倉田百三

※次に上げるのは、「新しき村福岡支部(福岡市大名町二丁目三ノ二)宛の百三書簡である。

⑬年月日不詳(葉書/印刷)

私は今度左記の所に転居しました。一寸御通知致します 東京府下荏原郡入新井町新井宿美奈見一一〇九 倉田百三 電話大森六〇四番

二 真砂嘉十郎宛武者小路実篤書簡

①大正八年（推定。②以前カ）月日不詳（葉書・筆書き／〈表〉六日 新しき村 実篤）

突然小島が上りました処、御親切にしていたゞき小島からも随分よろこんで来ました、私達もうれしく思ひ、安心いたしました、万事がおかげでうまくゆき皆感謝しております、なほこの上よろしく御ねがいたします。小島も今度出来るだけ儉約してやってくれると皆の信用もとり返せて大へんいゝと思っております、宮崎だと五十日入院しなければならなかつた所が二週間ですみ、その他あまり都合よく御かげでゆきましたので本当に皆感謝しております。倉田君にどうぞよろしく。

②大正八年八月一三日（消印 8・8・12）（葉書・筆書き／〈表〉十三日 実篤）

小島のこと本当にいろ／＼御世話になりました。費用も思った半分もいらず、病氣も思った日数の半分もかゝらず、なほることが出来たのを感謝します。支部のあつたおかげと思ひます。二十□（口カ）だけ君あてに今日送ります。今□（回カ）君にお日にかゝらなかつたことを残念に思ひます。皆さんによろしく。

③大正八年十月一日（消印 8・10・1）（葉書・ペン書き／〈表〉十月一日 神戸ニテ 実篤）

始めてお目にかゝれてうれしく思ひました。そのさい御親切にありがたう。又お送り下さつてありがたう。感謝いたします。又御面倒なことをおねがいたしますが、エの一つゝみ小さいうすい紙のフクロに入れた。ダキンチやミケルアンゼロのフク製の入つてあるのを忘れて来たらしいのです。御ついでの時一寸しらべていたゞけるとうれしく思ひます。もしありましたら左の処にお送り願ひます。なかつたら御一報願ひます。

東京麴町区元園町一ノ三十八、武者小路

④大正九年六月二十六日（消印 9・6・26）（葉書・筆書き／〈表〉二十六日 実篤）

いつもいろ／＼御世話になり又お世話をかけます、感謝します、糸子さんもやつと入院が出来て安心しました。

寄付金十二口ありがたう、とゞきました。雨つゞきでしたが、今日から天気になり出しさうです。皆さんによろしく

⑤大正九年十月十一日（消印 9・10・11）（葉書・ペン書き／〈表〉東京麴町区元園町一ノ三八 武者小路実篤）

先日お手紙ありがたう。

ホッホはまだつきませんからエの方は駄目になりました。しかし演説会はしたく思っています。二十七日にしたく思ひます。つくのは二十六日になるかと思ひますが、つく時間はわかったら電報を打ちます。

二十七日の夜の汽車で村へ帰りたく思っています。小(川カ)村君にさうおっしゃって下さい。くわしくはお逢ひして。

⑥大正十年七月三十日(消印10・7・30)(葉書・筆書き／へ表)七、三〇、新しき村実篤)

久しく御無沙汰、先日房子の病氣御見舞下されてありがたう、この五日から故郷に養生にやりました。

今度九半月ば(十四日にこゝをたつつもりです。)に上京の途中白樺のロダンの彫刻を返しにゆくので福岡で一度も展らん会しないのもと思ひます、御都合よく御骨折り願へれば十五日の一日だけ展らん会をしたく思ひます、十六日には大分でやる約束をしました。一日だけでは短かすぎるやうでしたらとりに来ていただくか、誰かに持ってもらうかしたいと思ひます。御都合御知らせ下さい。

⑦大正十一年二月十二日(消印11・2・13)(葉書・筆書き／へ表)二月十二日 実篤)

御手紙拝見

よくゆくことをのぞんでゐます、

かくやう心がけます、かけましたらお送りします、急ぎ

大須賀君の弟さんが村に来てゐますいい方なのでうれしく思っています

⑧年月不詳(葉書・筆書き／へ表)二十七日 実篤)

先日房子が参りました時、ナイフと封筒誠にありがたう、少し恐縮しました。しかしうれしく思ひました。又今度は菓子ありがたう、しかし正直に云ふと箱がこわれて、中に八本位きり菓子がのこっておりませんでした。切角送っていたのに、御厚意だけ十分いたぶきましたが、とりあつかいが乱暴ですからそのおつもりで願ひます。諸兄によろしく。

⑨年月日不詳(葉書・筆書き／へ表)新しき村 実篤)

御手紙と御菓子ありがたう、博覧会で随分賑かだと思ひます、何か参考になるものでもあつたら見ておいて下さい。今月末に志賀がくるはずで、来月は新しい兄弟を五六人迎へることが出来るのをたのしみにしてゐます、

⑩年月不詳(葉書・筆書き)

先日は蓄音機の音楽会が盛景だったさうでうれしく思ひました。二

十円電報かわせて送って下さってありがたう。もうお礼を誰かゝ出したことと思ひますが、僕は毎朝筆の方の仕事もしてゐるので、つかれて御無沙汰しています、房子が帰りに又御世話になるやうに云つて来ました。どうぞよろしく。いつも御世話をかけてすまなく思ひます。お母様にどうぞよろしく。二十三日 実篤

①年月不詳（葉書・ペン書き／へ表）二日 実篤

十三口の御寄付とどいてゐました。雑誌の今度のはのつてゐるかと思ひます。私は五日にたつことにしました。六日の朝六時に博多駅を通ります、その時蓄音機のフを持ってゆきますから誰かにまぢがへずにとりに来てもらつて下さい。朝早くつて御気の毒ですが、今田君の村から出たことは理由をはつ切り云ふのは礼にそむいてゐると思ひます。独身の人はよろしいが夫婦の人には今度のケンヤク実行は随分気の毒です。仕方がありませんが、帰りににはゆっくりおよりしたく思つてゐます。エが来たらそれをもつておよりしたく思つてゐます、村のことは安心してゐて下さい。二十何人の責任者が心を本当に働かして最上の方法をつくしてすゝんでゆくのですから、いろいろのこと云ふのは反つて面白くないと思ひます。しかし今度はずべてが無事にいつてゐるのです。辻君夫婦も明日か明後日村を出ます。矢張り村の貧乏が元因で療治費などを十分に出せなくなつたのが元因です。仕方がありません。

②年月日不詳（葉書・筆書き／へ表）新しき村一同

賀正

みな元気にしてゐます

お喜びください

兄のお元気を祈ります、

※以下に上げる二通の葉書は、「新しき村東京支部」から「真砂嘉一郎と支部会員」宛のものである。

③大正九年九月二十六日（葉書／へ表）ペン書き（実篤とは別人の筆跡力。宛名・真砂嘉十郎兄、福岡支部諸兄。差出人・新しき村東京支部（印）。差出人印の上方に、26・9・1920 下方に「臨時集會」の添え書き。）

実篤、房子他二十七名の筆書き署名寄せ書き。

④年月日不詳（葉書／へ表）③に同じ。ただし、日付けおよび臨時集會の記載なし。）

右上角に「五」、右下「月」、左上角に「例」、左下「会」の筆書きがあり、木村莊五、直昭^⑤他十二名の筆書き署名寄せ書き。武者小路の署名なし。

注

(1) 最も新しい注目すべき成果として、大津山国夫氏の『武者小路実篤研究―実篤と新しき村―』(平9・10)、奥脇賢三氏の『検証「新しき村」』(平10・5)がある。

(2) 『新しき村』第二年一月号(大正8・1・1)の「六号雑記」に、七年十二月九日の日付を持つ「倉田百三兄に、御病氣は其後如何ですか? 先日武者小路先生から貴君の今度村に入会されたことを聞いてずいぶん喜しく思いました。……(謹吾)」という一文が掲載されている。

(3) 作者は井原欽之助。

(4) 嘉十郎の写真資料では、「『新しき村』福岡支部」と注記された集合写真が、倉田百三、武者小路実篤、真砂嘉十郎を含め総勢一六名のものと、嘉十郎を含め八名のもの二葉が残されている。

(5) 開催場所不明。

(6) 書簡日付は、原則として、記述年月日を基本とし、消印の鮮明なものそれぞれ記しておいた。百三書簡①―⑨は「福岡市大名町二丁目二一〇二 真砂嘉十郎」宛、⑩―⑬は「福岡市薬院原ノ町四〇三番地 真砂嘉十郎」宛である。ただし、嘉十郎は、昭和五年には福岡市今泉九四番地に転居しているので、⑩―⑬の葉書には、おそらく局員の手によるものであろうが「今泉」の添え書き訂正がしてある。実篤書簡はすべて「大名町二丁目二一〇二 真砂嘉十郎」宛である。

なお、両書簡とも、旧字体は新字体に改め、変体仮名は、煩瑣をさけるため翻字していない。

(7) 促音便の表記については、大文字と小文字が混用されており、判読が難かしいが、はっきりと小文字表記と確認できるものは小文字表記とした。また、旧仮名づかいも揺れが多く、いちいちママの注記はせず、原文通りとした。武者小路書簡も同じ。

(8) 消印が二二日であるので、実篤の日付け記述が誤りであろう。

(9) 永島直昭。

〔付記〕ここに紹介することのできた資料は、すべて真砂嘉十郎氏のご子息 真砂嘉一(福岡市在住)、真砂隆助(広島市在住) 両氏の所蔵されているものによる。ご多忙の中を資料の閲覧を初めとして、煩瑣な質問にも快く、懇切に応じて下さった両氏に衷心よりお礼申し上げます。

——いわさき・ふみと、本学学校教育学部教授——